

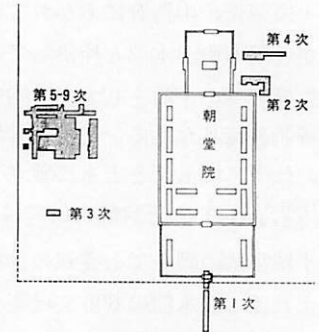
飛鳥藤原宮跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡では、1972年度に、藤原宮跡で西方官衙地区を第5～7次にわけて発掘調査し、さらに1973年度も継続して8・9次の調査をおこなっている。

また、明日香村内で、各種の建築にともなう事前調査として、飛鳥資料館建設地の上ノ井手遺跡、坂田寺跡、奥山久米寺跡、飛鳥浄御原宮跡推定地の調査を実施した。

以上の調査地点とその期間・面積については、第1表の通りである。



第1図 藤原宮発掘位置図

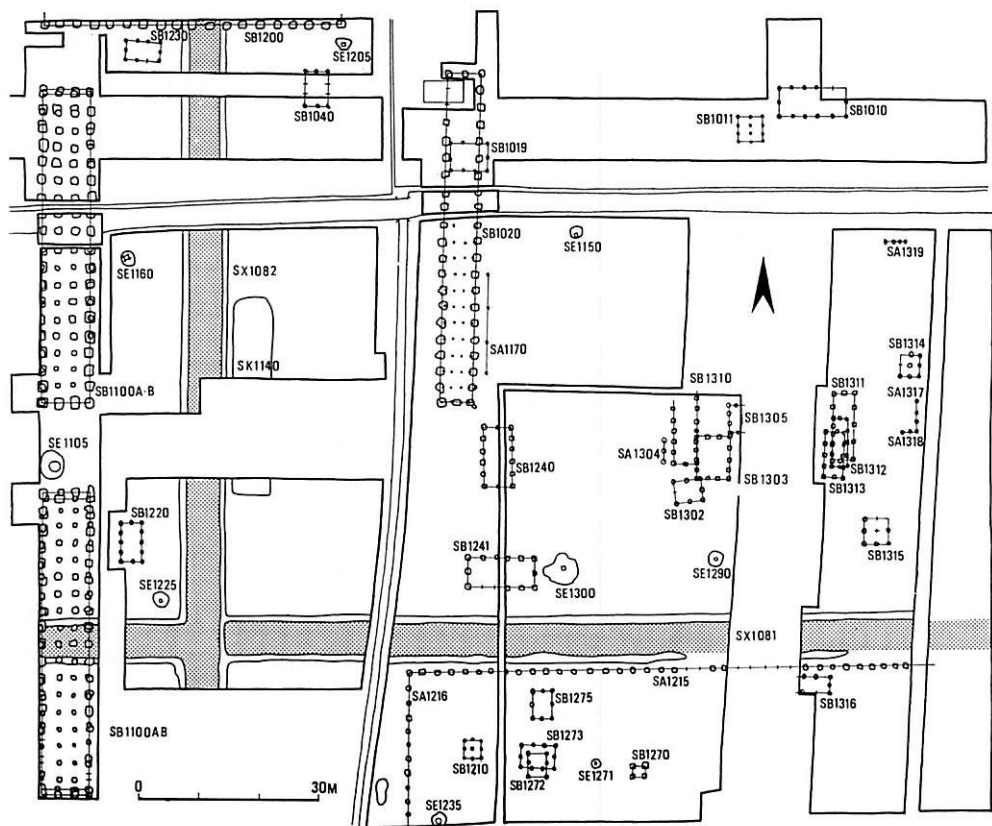
藤原宮西方官衙地区（第5～9次調査）

調査地は藤原宮の西面中門推定位置の東南部分にあたり、鴨公小学校の移転予定地となっている所である。調査は5回にわけ、1973年度にわたって計115aを発掘した。ここでは、それらをあわせて報告することとした。検出した主な遺構は掘立柱建物29・柵5・井戸9・土境6と道路及びその側溝などである。これらの遺構は大別してA・Bの2期に分けられる。B期の遺構は藤原宮期のもので、A期の遺構はB期以前のものである。

A期 東西道路SX1081とそれに直交する南北道路SX1082によって区画されている。SX1081・1082はいずれも道幅約6mで、両側に幅1m前後の素掘りの側溝をとまなう。SX1082は宮の中軸線から西へ3町(399m)の位置にあり、SX1081は宮の南北中心線から南へ1町(133m)の位置にある。この道路の側溝からは、7世紀後半の土器が多く出土したが、瓦は1点も検出されなかった。調査地域の南寄りでは東に延びる柵SA1215を38間分、SA1215の西端で南に折れる柵SA1216を11間分検出したが、ともに調査地域外に延びている。SA1215はSX1081の南側に平行してあり、真東西に対し東で北に1°26'傾き、SA1216と

調 査 地 区				調 査 期 間	調 査 面 積
藤原宮	第5次	6AJL-A・B 6AJF-U 6AJK-F	西方官衙	1972. 3.11～1972. 8. 2	32.3 a
	“ 6 ”	6AJL-A 6AJG-P	“	1972. 7. 3～1972.11.12	11.2
	“ 7 ”	6AJL-A・B 6AJG-P・Q	“	1972.11.13～1973. 3.25	17.7
飛 鳥	明日香村 大字奥山	5ZLK-M・N	上ノ井手遺跡	1972. 5.11～1972. 8.31	8
	“ 祝戸	5BST-F	坂田寺跡	1972. 8. 1～1972.10.18	3.5
	“ 奥山	5BOQ	奥山久米寺跡	1972. 9.20～1973. 1.25	0.7
	“ 飛鳥	6AMD-V	飛鳥浄御原宮推定地	1972.10. 9～1973. 1.20	4.7

第1表 1972年度発掘調査状況



第2図 西方官衙地区発掘遺構平面図

の内角は 91° である。建物は小規模のものが多く、散在しているが、建物の方位および重複関係より数期にわたって建てられたことがわかる。これらの建物の中にはS X 1081・1082, S A 1215・1216が作られる以前の建物もあると思われる。S B 1011・1210・1314等は総柱であり、倉庫風の建物であろう。これらの建物に近接した所で6基の井戸を検出した。S E 1205には縦組みの、S E 1300には横組みの井戸枠がある。いずれも一辺1 m前後の小型の井戸である。S E 1271からは7世紀中頃の土器が出土した。

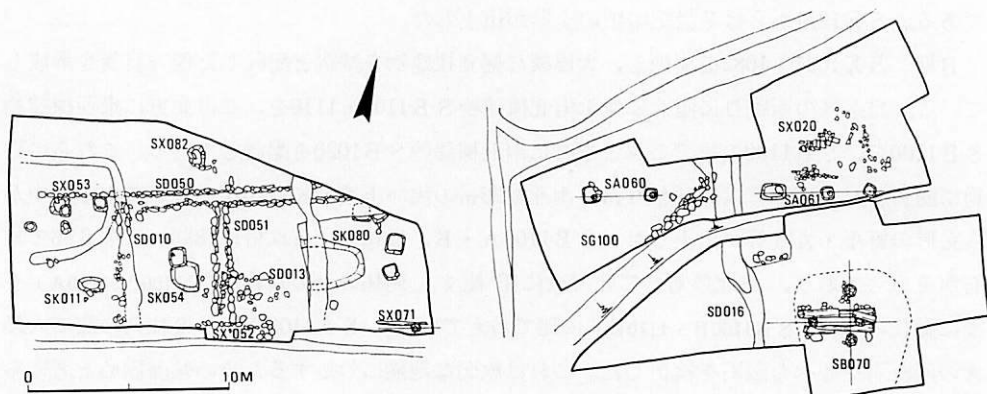
B期 S X 1081・1082を廃絶し、大規模な掘立柱建物を整然と配置した西方官衙を形成している。発掘区の西寄りに南北に並ぶ南北棟建物S B 1100・1110を、この北方に東西棟建物S B 1200を、S B 1100の東でこれと平行に南北棟建物S B 1020を配置している。これらの建物に囲まれた中央部には東西幅6 m、南北幅33mの浅い土塋S K 1140がある。この土塋中から完形の軒平・丸瓦等が出土した。S B 1100A・B, 1110A・Bは桁行18間、梁間3間で柱筋がそろっており、真北に対して北で東に $16'$ 傾く。側柱のみの建物(S B 1100A, 1110A)を後に総柱の建物(S B 1100B・1110B)に建て替えている。S A 1100A・Bの柱穴の底で人頭大の河原石を並べた敷石を検出した。これは軟弱な地盤に対処するための基礎固めと考えられる。S A 1100・1110の棟通りは宮の中軸線から西に421mの位置で、S B 1100の南北心は

宮の南北中心線から南へ66m, S B1110の南北心は南へ133mの位置にある。S B1200は桁行18間で西妻をS B1100・1110の西側柱列にそろえている。S B1020は桁行20間、梁間2間の細長い建物で真北に対し北で東に $1^{\circ}05'$ 傾き、東西心は宮中軸線から西へ355mの位置にある。この建物は南半の11間分に床束の礎石があった。この床束礎石は30~40cm大の自然石で東西側柱の内側と、両側柱の間を3等分する位置にある。B期の各建物の柱間寸法は2.6~2.8m前後で、唐尺の9~9.5尺前後の寸法にあたる。各建物の方位は正確には一致しないが、その配置もこの9尺を単位寸法として計画されたい。これらの建物付近にはこれに付属すると思われる井戸がそれぞれ存在する。S E1160には横組みの、S E1150には縦組みの井戸枡がある。いずれも一辺1m前後の小型の井戸で、枡材は建物部材を転用したものである。S E1105の埋土中からは土器・木簡・削り掛け・鋤の未製品・籠・鮑の殻が出土した。木簡には付札1点、文書風断片1点がある。B期の遺構からは少量の瓦が出土している。

今回の調査により、A期には規模の大きな建物は一棟もなくまばらに散在していること、A期の道路は岸俊男氏の藤原京条坊復原図にしたがうとS X1081は四条大路と五条大路にはさまれた小路の延長上に、S X1082は右京一坊大路と二坊大路にはさまれた小路の延長上にあたるのが判明した。またB期には、A期の道路を廃絶し京の条坊町割計画線をもとにして地割を行ない、大規模な建物を配置した宮の西方官衙ブロックを形成していることが明らかとなった。この地区は平城宮では馬寮の位置にあたり、その遺構は平城宮馬寮といくぶん類似している。しかし建物の構造上の特徴はかなり異なる。B期の官衙の性格究明については今後の調査を待たねばならない。

坂田寺跡

この調査は、明日香村大字祝戸183・190番地で、建設省が実施する祝戸国営公園建設に伴う事前調査である。調査地点は、大字坂田から栢森に至る県道と、坂田の集落へ通ずる旧道とが分岐する地点の西方約50mのところで、通称「まら石」という石造物のすぐ北側である。付近一帯は、北方の飛鳥川に向かって下がる傾斜地である。調査は、旧道を挟んで東西に長



第3図 坂田寺跡発掘遺構平面図

いトレンチを設定して行なった。調査の結果、この地域では傾斜地を数回にわたって整地していることが判明した。検出した遺構は池1・溝7・掘立柱列2・建築物1などである。これらの遺構は大別してA～Dの四期に分けられる。

A期は7世紀前半にあたり、旧道東側のAトレンチで池SG100を検出した。池の西・北端は発掘区外になるため全規模を明らかにし得なかったが、南北幅10m・東西幅6m以上で、中央部の深さは1m以上ある。東側の岸には護岸のため、高さ約1mの石垣を築いている。

B期は7世紀後半にあたり、旧道西側のBトレンチで、土壌SK080・素掘りの溝SD081、土壌状の落ち込みSX082などを検出した。

C期は8世紀前半にあたり、Bトレンチでは溝SD050・051を検出した。いずれも石組みの溝で、東流する東西溝SD050に南北溝SD051が合流する。東西溝は全長12m以上・内幅0.5m・深さ0.5m、南北溝は全長約10m・内幅約0.5m・深さ約0.4mである。Aトレンチでは掘立柱列SA060・061を検出した。SA060は東西に並ぶ2本の柱列で、柱間は2.94mである。直径約30cmの柱根が残っていた。SA061はこの柱列の東延長線上6.2mのところから始まる。柱間は西から2.5m・2.0mである。SA060とSA061との中間にあたる柱位置には柱掘形が確認されなかったが、両者は柱筋がそろっており、同一の柵である可能性が考えられる。Cトレンチでは4本の柱が一つの大きな掘形内に建てられている建築物SB070を検出した。このうち2本はSA060・061と平行で、柱間は2.4m、他の2本はこの柱列に直交する形で建ち、柱間は2.4mである。東西列の柱根は直径30cm、南北列の柱根は直径60cmほどである。東西列の柱の根元には根固め用の材木を横たえ、さらにこの横材の外側には石を詰めて固定している。南北列の柱の根元には根巻き石状に石を据えている。SB070の東西柱列の西延長線上約20mの位置にあたるBトレンチ東南隅でも、SB070の東西列の柱と同様に材木を根元に横たえた柱根1本SX071を検出した。SB070に関連するものであろうか。

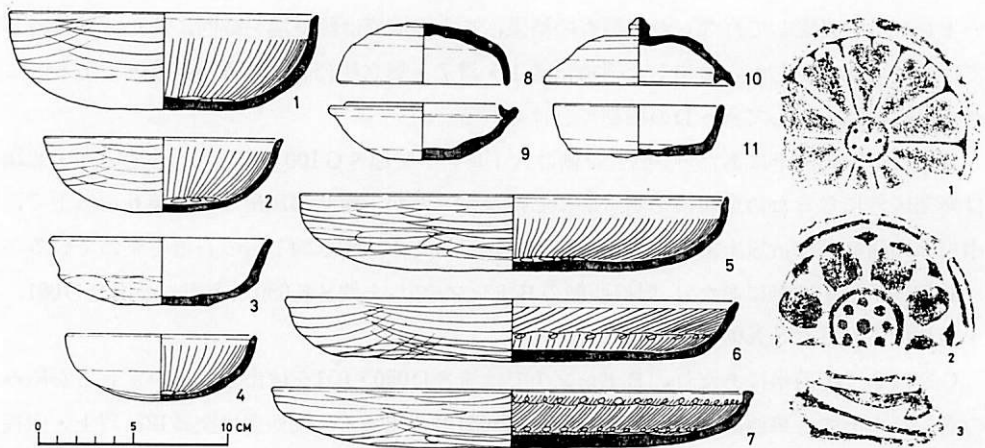
D期は8世紀後半にあたる。Bトレンチでは溝SD010・012・013、土壌SK011、石敷SX014などを検出した。溝はいずれも北流する南北溝である。SD010は内幅・深さとも0.3mほどの石組み溝で、北部は素掘りの溝となり西へ折れまがる。SD012・013はいずれも

幅1mほどの浅い素掘りの溝である。Aトレンチでは瓦堆積SX020、溝SD016を検出した。SX020は丸瓦・平瓦が交互に組み合ったまま反転して転落した状態で出土した。この状況から瓦堆積の南に建物が想定されるが確認できなかった。Cトレンチでは溝SD016、石敷SX015・018を検出した。

これら四期にわたる遺構のほかに、Bトレンチ下層で古墳時代の遺物包含層があった。



第4図 建築物SB070



第5図 池SG100出土の土器と軒瓦

A期の池から出土した遺物には、土器・瓦・木簡・木製品などがある。須恵器には各器種があるが、量は土師器と比較して少ない。杯・蓋についてみると、口径9cmほどの内面にかえりをもつ蓋(10)とこれに組み合う杯(11)とが主体をなし、さらに、ほぼ同径で短い蓋受けの立ち上がりをもつ杯(9)とこれに組み合う蓋(8)とが少量共伴している。土師器は杯・皿が主体をなす。杯は、形態・胎土・色調からA(1・2・4)・B(3)の二つに分けられる。Aは底の丸い碗形の器形で、胎土が精良で赤味がかった褐色を呈している。Bは、底部と口縁部との境が明瞭で口縁が外方に屈折する器形で、胎土は微細な砂粒を含み淡褐色を呈している。この種のものには暗文は認められない。皿は細部の形態によっていくつかに分けられるが、いずれも内面に暗文がみられる(5・6・7)。これら一群の土器は小治田宮跡推定地の調査の成果などを考慮すると、7世紀中葉をやや遡る時期のものと考えられる。瓦の出土量も多い。軒瓦では8葉の単弁蓮華文軒丸瓦(2)や、飛鳥寺創建時のものと同型式の単弁10弁蓮華文軒丸瓦(1)、手彫りの忍冬唐草文軒平瓦(3)などがある。木簡には「十斤」と書かれた、付札が3点ある。木製品には、糸巻・琴柱・曲物・横櫛・杓柄などがある。ほかに「卍」を墨書した須恵器の杯・「知」と線刻した土師器の杯がある。

B期の土壙(SK080)と溝(SD081)からの出土遺物のうち、土器は藤原宮出土のものに近い型式のものである。木簡は「賀年□」と判読できる断片が出土した。

C期の石組溝(SD050・051)出土遺物のうち、土器は型式的にはほぼ神亀年間頃のものである。墨書したものが多く、「知識」「南」「金」「真」「新」「成」「大」「和」「太」など30数点ある。木簡は2点出土したが断片で判読できない。

以上のように、遺構に伴う遺物が多く、とくに池(SG100)や石組溝(SD050・051)出土の土器は、飛鳥地域での土器編年の基準となる良好な資料といえよう。

今回の調査で検出した遺構は性格の判然としないものが多いが、これらは、付近の小字名や瓦・「卍」の墨書土器などの遺物からみて、おそらく坂田寺に関連するものであろう。坂田寺の創建については、文献史料では用明2(587)年、推古14(606)年などの造寺の記事がある。発掘の結果、7世紀前半には坂田寺が造営されていたと考えられる。

奥山久米寺跡

この調査は、明日香村大字奥山645・669・670番地の、家屋新築にともなう事前調査である。発掘地点は、久米寺現本堂北辺より北へ5m、本堂西辺より西へ14mの地点（本堂北側地区）と、久米寺塔跡の南隣接地（塔跡南側地区）の2ヶ所である。

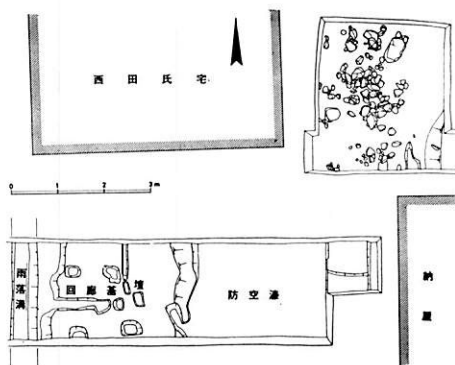
発掘の結果、本堂北側地区では、久米寺の中心伽藍をとりまく推定西面回廊の基壇および、西側の雨落溝を検出した。基壇は旧地形の上部を約1mほどの厚さで整地して平坦面とし、その上面に赤褐色の砂質粘土を高く盛土している。現存部分でその幅は3.4mあり、高さは最も良く残った部分で25cmである。基壇上面には後世に掘られた小穴がいくつかあったが、基壇化粧を示す構造物は遺存していない。また、基壇の東半部は、後世に削平されている。したがって、今回の調査では回廊基壇幅については、その数値を得るに至っていない。

基壇西側の雨落溝は素掘りで、幅55cm、深さは現存基壇上面から43cm、基壇外側の平坦面から22cmの深さである。この雨落溝および基壇外側には、多量の瓦類が堆積していた。

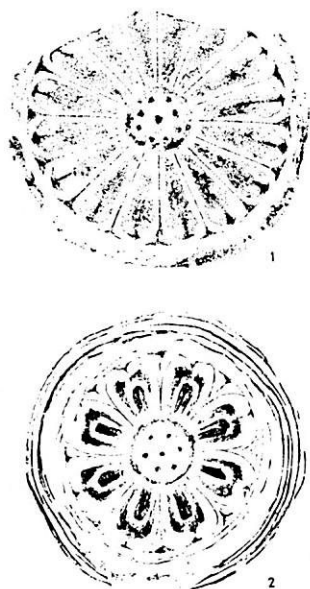
出土遺物には、瓦・土器がある。瓦には軒丸瓦六型式、軒平瓦二型式のほか、多量の丸・平瓦がある。軒丸瓦は図示したもののほか、単弁八葉蓮華文やいわゆる大官大寺式の軒丸瓦がある。軒平瓦は、重弧文と大官大寺式のものがある。土器類は下層の整地土中から古墳時代の須恵器・土師器が若干出土したにすぎない。

塔跡南側地区では、発掘地は塔跡より現状で約120cmほど低くなっている。遺構は、わずかに江戸時代末以降の建物の跡が発見されたにすぎず、久米寺関係の遺構は後世の削平のため、確認できなかった。なお、本調査に関連して、塔跡の西側の畑地に、二本のトレンチを設定し、西回廊の検出を試みた。周辺は後世の削平が著しかったが、本堂北側地区で検出した西面回廊の西側雨落溝の延長部分と考えられる痕跡が遺存していた。

奥山久米寺の回廊基壇の位置および実数値については、久米寺自体の伽藍中軸線が明らかでなく、適確に指摘できない。かりに塔跡礎石群をほぼ伽藍中軸線に近いと想定した場合、今回検出した基壇西端からこの線まで約32mである。



第6図 奥山久米寺跡発掘遺構平面図



第7図 奥山久米寺跡出土軒丸瓦

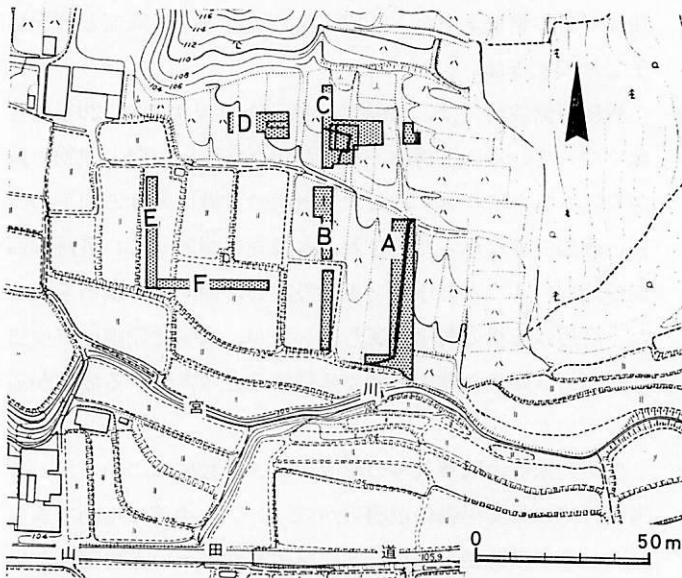
上ノ井手遺跡

この調査は明日香村奥山字上ノ井手・東垣内で、当研究所が設置する飛鳥資料館の建設にともなう事前調査として実施した。調査地点は、奥山久米寺跡の東約400m、山田寺跡の西約450mのところ、明日香村から桜井市方面へ通じる通称山田道と呼ぶ県道の北側、山合いの南斜面である。

調査の結果、暗渠2・掘立柱建物4・掘立柱列3・井戸1のほか、数条の溝などを検出した。これらの遺構は大別して4期に分けられる。

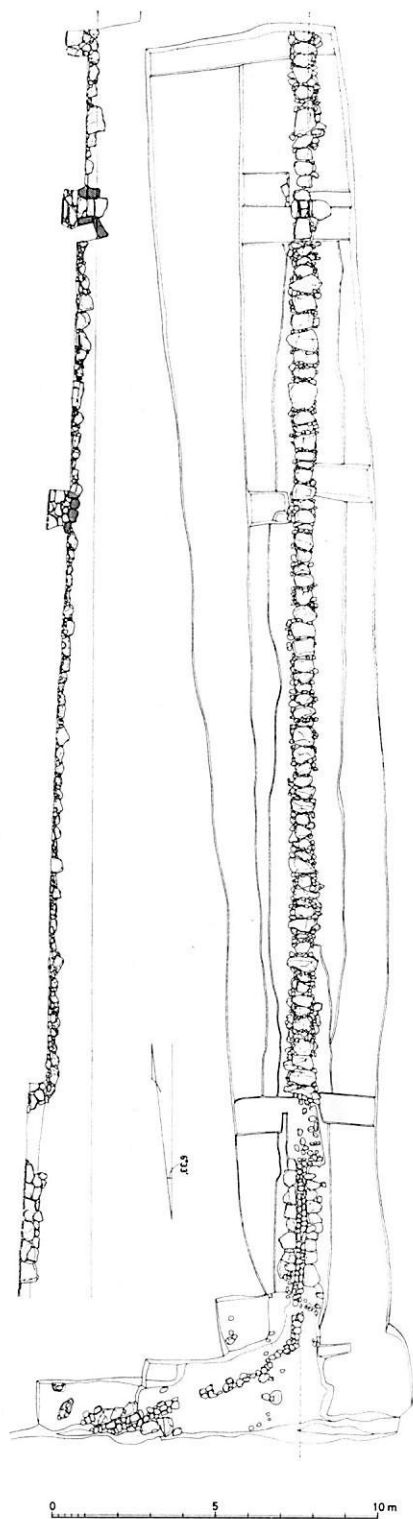
A期は古墳時代にあたり、溝・井戸などがある。溝は北東から南西にのびる素掘りの大溝で、幅約4.5m、深さ1m以上で、全長30m以上に及ぶものと思われる。埋土より5世紀前半の土師器が出土している。井戸は井戸枠を有するもので、埋土より5世紀の土器が多量に出土した。

B期は7世紀代にあたり、この時期には暗渠・溝などがある。暗渠は発掘区の東寄りのAトレンチで検出した。南北方向の石組暗渠で、全長73m以上におよび、途中にマンホール状の施設をもっている。今回確認した範囲では、北端から65mの間は一直線に走り、やがて西に曲がる。その先端は県道添いの宮川に注ぐものと思われるが、曲折部付近から先では破壊の度が著しく、8mほどしか遺存していなかった。直線部分の方位は真北に対して北で東に $6^{\circ}33'$ 傾いており、勾配は $1/100$ である。構造は横穴式石室に似たもので、底に扁平な礫を敷き、両側壁に面をそろえた自然石を2・3段に積み、その上に長径60~70cm大の自然石をのせて蓋石としたものである。側石・蓋石の隙間には小石をつめ粘土で裏込めをしている。溝内側で、上幅40cm・下幅30cmで、深さ60~70cmである。マンホール状の施設は、暗渠の



第8図 上ノ井手遺跡発掘位置図

蓋石より側石を2段ほど高く積み上げたもので、50cm×40cmの長方形の開口部をもつ。この開口部上面から底までの深さは1.4mである。この暗渠は地形からみてさらに北方に延び、山合いの奥に暗渠の取水口などの関連施設があるものと考えられる。この暗渠は、溝埋土の出土遺物からみて、7世紀中葉の遺構と考えられる。発掘区の西寄り



では素掘りの東西溝を検出した。全長10m以上、幅約1m・深さ約0.5mである。埋土中より多量の土師器・須恵器が出土した。これらの土器群は型的に7世紀後葉のものである。

C期は8世紀後半にあたり、奈良時代末頃の土師器把手付壺が出土したのみで、この壺に伴う遺構やその他の遺構は確認できなかった。壺の中には、和同開珎5枚・万年通宝4枚・神功開宝20枚と骨片が納められており、蔵骨器として埋置されていたものと思われる。

D期は中世にあたり、掘立柱建物・掘立柱列・暗渠・溝などがある。発掘区中央北寄りでは3間×4間の東西棟建物(桁行2.1m等間・梁間1.8m等間)を検出した。この建物の南側では南北方向の暗渠を5mほど検出した。幅約30cmで、10~15cm大の礫を詰めたものである。この暗渠の北側では東西棟建物と重複する石組暗渠を検出した。両端は未確認であるが、南北方向に4mほど延び、北で西へ直角に折れ曲がり8.5m以上延びている。内幅15cm、深さ10cmで、扁平な礫を立て並べて側壁とし、20cm~30cm大の礫で蓋したものである。この遺構は重複関係から、東西棟建物や南側の暗渠に先行する時期のものである。これらの遺構の西方では梁間1間(柱間1.9m)・桁行3間以上(柱間1.6m等間)の東西棟建物を検出した。このほか発掘区の東南や中央南寄りでは掘立柱列を、西南では南北大溝などを検出した。出土遺物には土師器や瓦器などがあるが遺構にともなうものは少ない。

今回の調査では古墳時代から中世にわたる遺構を確認したが、特に注目されるのは石組暗渠である。現段階ではその性格について明らかにし得なかったが、今後関連遺構の調査をまって検討したい。

第9図 大石組暗渠実測図

飛鳥浄御原宮跡推定地

この調査は、明日香村飛鳥水落213の1～3番地の家屋新築にともなう事前調査で、奈良県教育委員会と合同で実施した。調査地点は、甘樫丘の東方、飛鳥小学校南側隣接地である。この付近一帯は飛鳥浄御原宮跡と推定されており、東方約50mの宇石神の水田では、かつて「須弥山」・「道祖神」や石組溝・石敷き遺構が発見され、小学校敷地内でも石敷きを検出している。

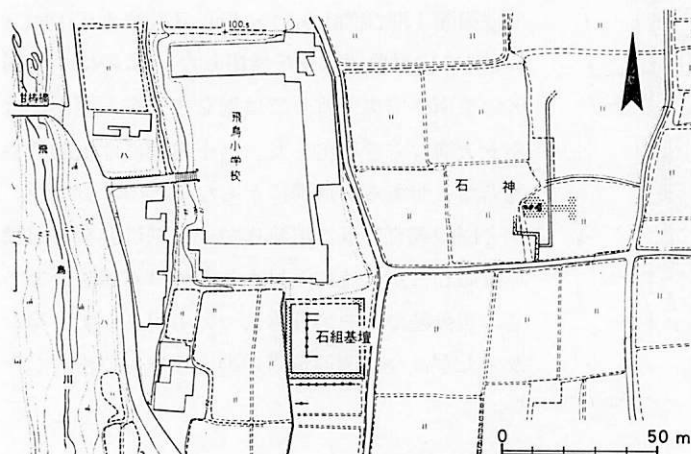
調査の結果、石組遺構1・礎石建物1・掘立柱建物1などを検出した。

石組遺構は石組溝を正方形にめぐらしたもので、石組溝の心心距離が東西・南北ともに24.3mである。石組溝はその断面が逆合形で、底幅約1.8m、深さは現状で0.6m、両側壁の傾斜は約17度である。溝を構成している石は花崗岩の自然石で、径60～80cmで、大きいものは1mに達する。底石は平坦に敷き並べ、側石は面をそろえて現状4～5段積みあげている。特に南辺は敷石の残存状況が悪く、ほとんどは石の表面が剥離して残った抜取痕跡から石敷を確認し得た。石組溝内の堆積土は一時期のもので、多量の焼土を混えた暗褐色土で、流水による堆積は全く認められなかった。

礎石建物は石組溝で囲まれた内側にあり、南北五間の礎石据付痕跡を検出した。柱間はほぼ2.8m等間であるが、北端の1間はこれより狭く、2.4mで柱掘形も他より小さく浅い。柱位置と石組溝との心心距離は、南と西で約6.4m、北では4m強である。

以上のことから、この石組遺構は礎石建物の基壇と考えることができよう。基壇上面の全体を発掘したわけではないので、礎石建物の平面規模をとらえることはできなかった。明確な結論は将来に待ちたい。

掘立柱建物は石組遺構の南辺の外側に接して建つもので、北側柱列6間分を検出した。一部この柱列と直交するトレンチを拡張し、西から2番目の柱穴より南へ約5.6mの位置に1



第10図 飛鳥浄御原宮跡推定地発掘位置図

個の掘立柱掘形を検出した。したがって、この建物は桁行6間以上、梁間2間（柱間は桁行、梁間とも2.8m等間）のものと想定される。この北側柱列と南辺の石組溝心との距離は約2.6mである。この掘立柱建物は、柱掘形が一部石組溝側石の据付痕跡を切っているため石組遺構より構築時期は下る

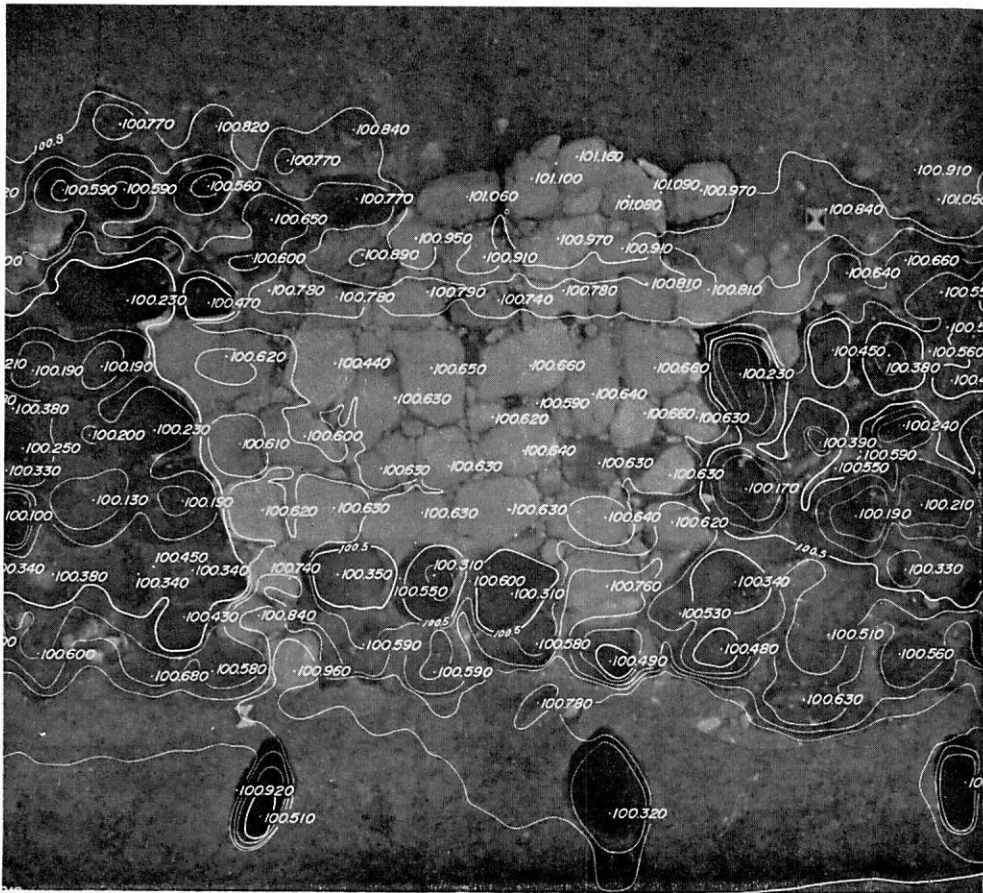
ものと考えられる。礎石建物とは柱間がほぼ等しい点を指摘しうるが、時期的関係は明らかでない。

遺物は、石組溝埋土より7世紀後半の土器類・鉄滓・フィゴの羽口・砥石などが出土している。

今回の調査では、遺構の全容を発掘していないので、その時間的な前後関係など不明な点が多い。これらの遺構が飛鳥浄御原宮と関係するものであるか否かについても明らかでないが、仮に宮殿に関連するものと考え、本遺構はその西南隅にあたるとおもわれる。この遺構が占める位置は、飛鳥寺との距離関係をみると、西門の心と石組西辺の溝心とは約145m、南大門から方二町で取った築地線と、石組南辺の心とは約38mである。本遺跡は飛鳥地域全体の地割計画や飛鳥浄御原宮との関係などを考えるうえで重要な手がかりとなろう。

なお、本発掘区の実測は遺方測量によったほか、石組溝とその抜取痕跡を正確に記録するため写真測量の方法をも併用した。撮影はヘリコプターによる垂直撮影と、地上での水平撮影をおこなった。

(菅原正明・山中敏史)



第11図 石組溝フォト マップ